第２章　添田町の維持向上すべき歴史的風致

本町は、古くから信仰を集める霊峰「英彦山」を擁しており、英彦山では中世に修験道が興隆したことでさまざまな社殿や宿坊が建ち並ぶ環境が形成され、麓では、英彦山への往来により街道沿いの市街地や集落が形成されてきた。これらの場では、神幸祭や民俗芸能等のさまざまな伝統的な祭礼行事が盛んに行われている。

歴史的風致は「歴史まちづくり法」第１条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地環境」と定義される。

本町の維持向上すべき歴史的風致は、下図に示すとおり、大きく６つのテーマに分類したうえで、全部で 12 の歴史的風致を見い出すことができる。

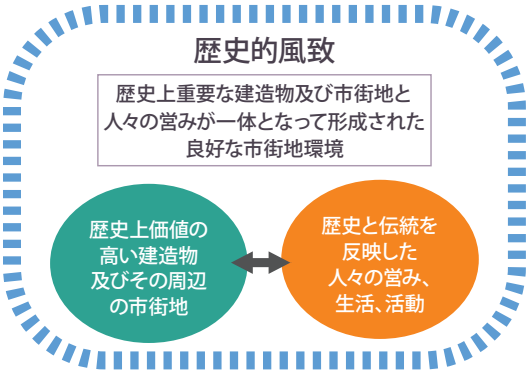

図　歴史的風致の概念図

１．英彦山神宮にまつわる歴史的風致
- １－１．柱松神事にみる歴史的風致
- １－２．御潮井採りにみる歴史的風致
- １－３．御田祭にみる歴史的風致
- １－４．神幸祭にみる歴史的風致

コラム１　峰入り（入峰）

２．添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致

コラム２　白山宮の権現祭

３．英彦山水系流域と民俗芸能にみる歴史的風致
- ３－１．津野神楽にみる歴史的風致
- ３－２．落合獅子楽にみる歴史的風致
- ３－３．野田獅子楽にみる歴史的風致

４．彦山踊りにみる歴史的風致

５．英彦山権現講をはじめとする英彦山詣でにみる歴史的風致

コラム３　英彦山詣でと英彦山がらがら

６．高住神社にまつわる歴史的風致
- ６－１．神幸祭（豊前坊丑日祭）にみる歴史的風致
- ６－２．豊前坊採燈護摩供にみる歴史的風致

コラム４　豊前坊天狗

図　添田町の維持向上すべき歴史的風致の構成

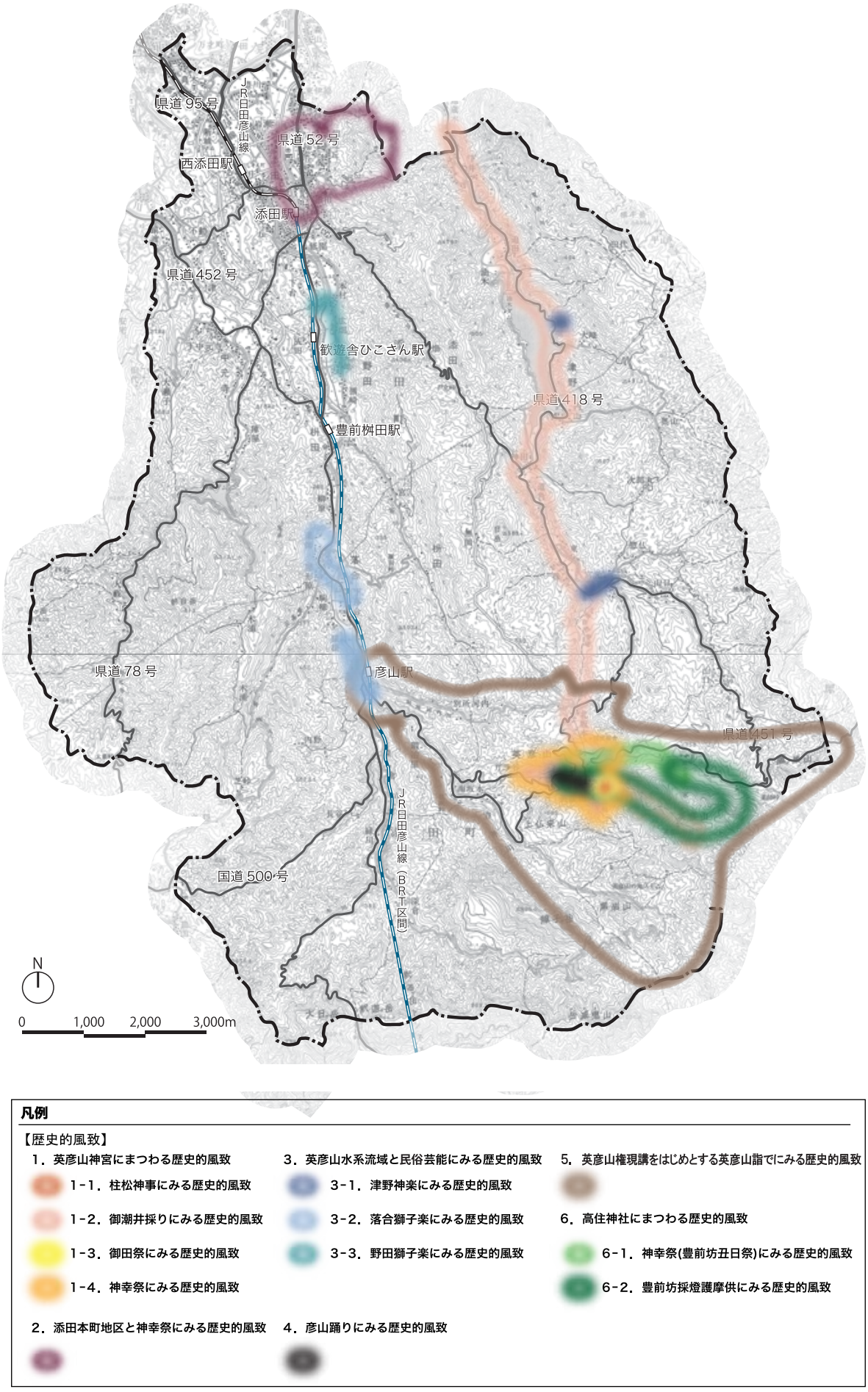

図　本町の歴史的風致の分布

１．英彦山神宮にまつわる歴史的風致

Ⅰ．はじめに

英彦山神宮参道

江戸時代、隆盛を極めた英彦山修験道の中心的な行事である松会祈年祭は、かつては「御潮井採り」「柱松」「御田祭」「神幸祭」の順に行われていたが、明治維新の廃仏毀釈、神仏分離のため、山伏の離山、人口激減などで開催時期や形を変えつつも「柱松」や「御潮井採り」、「御田祭」、「神幸祭」として護持されてきた。この神事は、英彦山神宮下宮の祭礼として、英彦山神宮奉幣殿*1から英彦山神宮銅鳥居*2を結ぶ参道空間において、往時の面影を保ちながら今日も厳粛に執り行われている。

英彦山神宮の歴史は古く、西国山岳霊場の中心として興隆したことに端を発する。『彦山流記』（鎌倉時代初期（13 世紀））には「二百余宇禅庵輾軒　如望諸仏浄土荘厳」とあり、英彦山には既に多くの行者が集い、軒を連ねて集落を形成していたことがわかる。大講堂や食堂、温室（入浴施設）、経蔵などの中心仏堂などの名も見られ、中世初期までには彦山霊仙寺の門前として先達・講衆が多く坊を構えた南谷、北谷、中谷、惣持院谷を中心に山伏集落の完成を見た。また、大永５年（1525）に阿吸坊即伝が英彦山で「三峯相承法則密記」などの修験道儀軌を修して、以降西日本の修験道の規範となるなど英彦山修験道が室町時代までに隆盛を極めた。

戦国時代各地の武将に翻弄され、天正９年（1581）の大友義統の焼き討ちや天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州平定に際し、寺領没収の難に遭った。しかし、秀吉死後前田玄以ら五奉行によって所領安堵されると、公家・大名の庇護を受け、一気に復興機運が高まった。特に、細川忠興が小倉に移封されると1100石の知行地が与えられ、元和２年（1616）には大講堂（現、奉幣殿）の再建、元和４年（1618）に大講堂本尊７体を安置した。また福岡藩黒田氏、小倉藩小笠原氏から知行地を得て、佐賀藩鍋島氏からは堂宇寄進を受けるなど藩主を外護の大檀那（寺を経済的に支援する有力な檀家）として取入れ、江戸幕府の宗教統制の「檀家制度」等と相俟って山中に多くの参詣者を迎えるに至った。

*1　文化財指定名称は「英彦山神社奉幣殿」であるが、文化財を指す場合を除き現名称である「英彦山神宮奉幣殿」と表記する。
*2　文化財指定名称は「英彦山神社銅鳥居」であるが、文化財を指す場合を除き現名称である「英彦山神宮銅鳥居」と表記する。

図　英彦山鳥瞰図（吉田初三郎、昭和８年（1933）、英彦山神宮所蔵）

寛文 11 年（1671）、山内の清浄化、風儀の取締りを強化し、「彦山町」を造り、店舗を構えさせて商人を定住化させて坊中や参詣者への便宜を図った。これとともに門前の形成も図られ、町より下の南側西谷（にしだに）、北側下谷の領域が江戸初期までに完成したとみられる。『彦山流記』（鎌倉初期（13 世紀））には南谷、北谷、中谷、惣持院谷の４谷の名しかみえず、当初門前は北から南へと延びていたことがわかる。これに加え、江戸時代に西へと門前を延ばし山伏集落を形成した。この後も門前下にも新屋敷と称される坊屋敷が伸び、唐ヶ谷（がらがたに）参詣道から日田道へと繋がり、多くの参詣者が門前に集った。銅鳥居も門前の拡充に併せ、貞享３年（1686）、現在の位置まで 500m ほど下に動かしたといわれている。銅鳥居下に下乗石の立つ参詣溜り「勢溜（せいだまり）」ができ、参詣者はここから駕籠（かご）や馬を降り、徒歩で参拝した。これにより英彦山は活気づき、檀家は九州一円に 42 万軒、末山は 70 カ所以上に達し、松会祈年祭の参詣者は７万人にもなったという。

図　英彦山門前まち割りと主要建造物の配置

Ⅱ．歴史的風致

１－１．柱松神事にみる歴史的風致

（１）はじめに

柱松は、松会の名の由来ともなる大柱を斎庭（ゆにわ）に立て、英彦山権現（ごんげん）に万物成就を祈念するトーテム（表象）信仰の現れであった。

室町時代には行われていることがわかっており、明治維新後は山伏の離山から柱松神事として正月行事として行われるようになり、奉幣殿前の境内中央に柱が建てられ、１年の豊作と泰平を祈念する行事として行われている。

（２）歴史的風致を形成する建造物

１）英彦山神宮奉幣殿（ひこさんじんぐうほうへいでん）（文化財名称：英彦山神社奉幣殿、重要文化財（建造物））

柱松神事から始まる松会祈年祭が行われる英彦山神宮奉幣殿は、かつての彦山霊仙寺の大講堂であり、英彦山の中心仏堂だった。大講堂は、天平 12 年（740）に創建されたとされ、『彦山流記』（鎌倉初期（13 世紀））によると「大講堂一宇　二階　七間一丈二尺間」と記されている。「二階」とあることから二階建の大規模仏殿であったことが窺われ、現在の奉幣殿よりも高かったことがわかる。また、桁行は 84 尺となり、現今の 74 尺よりも一回り大きな建築物であったことがわかる。近年の発掘調査で、中世講堂の礎石跡に赤色顔料が付着していて、外装に赤色塗装が施されていたことが判明した。また、豊後大友義統率いる４千人の軍勢に焼き討ちに遭い、焼失したと伝えられていたが、このことを示すように礎石が焼けて被熱した痕跡がみられ、土間下からも炭化層が確認された。

現在残る社殿は、棟札によると、元和２年（1616）に小倉藩主細川忠興により、彦山霊仙寺の大講堂として再建されたものである。

細川忠興の再建以後も、歴代小倉藩主によって、営繕がなされている。寛永９年（1632）、小笠原氏が細川氏に代わり入封しているが、寛文４年（1664）には小笠原忠真（おがさわらただたね）により大規模修理が計画され、翌５年（1665）に完成した。奉幣殿の小屋裏に残る昭和９年（1934）の修理銘板「官幣中社英彦山神社奉幣殿重修記」には、この修理を含め小倉藩小笠原家による営繕は英彦山霊仙寺が廃寺となる慶応４年（1868）までに享保８年（1723）、宝暦 13 年（1763）、天明３年（1783）、文化６年（1809）、嘉永６年（1853）の合計６度にわたって改修が行われていたことが記入されている。特に享保の修理では寄棟造の屋根構造を入母屋造に変更し、棟を一段と高くしたことが記されており、このときに掲げられたであろう奉幣殿の箱棟（はこむね）には、

英彦山神社奉幣殿（重要文化財）

奉幣殿（外陣から内陣祭壇を望む）

小笠原家の家紋である三階菱が装飾されている。明治元年（1868）の神仏分離にともない、英彦山霊仙寺は英彦山神社と改称したが、『彦山村戸長日記』（明治８年（1875））によると、英彦山霊仙寺の「大講堂」は英彦山神社の「奉幣殿」と改称されていることがわかる。しかし、現在の奉幣殿にも寺院講堂としての形態が残され、内部は仏堂としての内陣と外陣に区別され、内陣は化粧垂木の天井で、一段高く祭壇（須弥壇）が設けられている。この祭壇に元和４年（1618）細川忠興が本尊釈迦如来、阿弥陀三尊、不動三尊を安置したことが近年台風被害時に後堂の部材とともに発見された釈迦如来本尊の背面部材で判明した。これらの仏像は明治８年（1875）講堂内の仏像とともにすべて焼却された。（『明治維新神仏分離史料』（大正 15 年（1926））

奉幣殿は英彦山の中心社殿として、現在も威風堂々たる姿を示している。

（３）歴史的風致を形成する活動

１）柱松神事

柱松神事について、『彦山諸神役次第』（文安２年（1445））によると、正月 14 日松盛座、正月 26、27 日の御潮井採り、２月５日松会ナラシ座、２月８日勅宣延年祭の後、２月 13 日に柱松起こしが行われていたことが記されており、室町時代には行われていたことがわかる。『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801））にその様子が描かれている。

英彦山松会については、明治中期の『官幣小社英彦山神社古来伝来之祭典旧儀並音楽神樂等書上記』に詳細が示されており、松盛座については「陰暦正月十四日松盛座トテ、神事奉行所勤之両輪神官御田植司出仕…神事奉行へ対義之末、両輪御田ヨリ神事役割其他祭祀二閑スル…年中諸祭典事務取扱、潮井採等祭事ノ儀ヲ神事奉行二協議シ、座主ノ命令ヲ受」とあり、その年の諸役の分担が決められる。これは、現在も２月 14 日に行われている。その後、旧暦正月 26 日～ 27 日の御潮井採りで山内全山潔斎して、旧暦２月 13 日に「柱松起こし」が行われたことが見える。

明治維新後は山伏の離山から柱松神事として正月行事として行われるようになり、奉幣殿前の境内中央に柱が建てられ、１年の豊作と泰平を祈念する行事として行われている。

図　幣切り『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

図　柱松起こし『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

以前は柱松起こしは旧暦２月 13 日に行われ、終夜大講堂の洪鐘（こうしょう）を撞き、起夫 40 人が奉幣殿前の斎庭に長さ５丈８尺（17.6m）の巨大な柱松を建てていた。柱の頂には青白２色の幣帛（へいはく）が掲げられた。青は万物生成の春、白は万物成就の秋を象るとされる。また、柱には東西に二大龍王の大綱を張って、天地四序の和平を祈願する。松会の最後に、神事当役が柱に登って、御幣を燃やす「護摩採燈行事（ごまさいと）」、一刀のもとに御幣を切放つ「幣切（へいき）り行事」が行われていた。

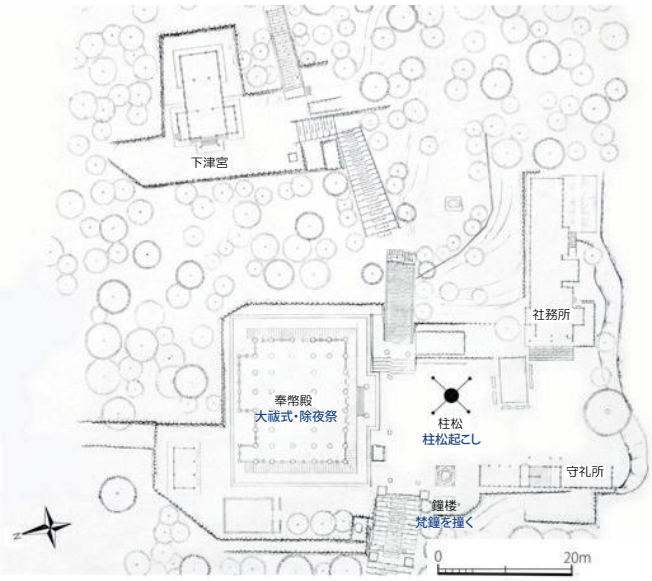

図　柱松神事の活動場所

柱松は藁を縄で括り付け、須弥山（しゅみせん）に準えて 33 の節が作られたが、今は半分ほどの大きさとなっている。

現在の柱松神事は、大晦日午後５時に神職と総代により奉幣殿で大祓式（おおはらえしき）を行う。その後、11 時ごろから一般参詣者による除夜祭を行っている。神仏習合の名残で、奉幣殿横の鐘楼に掛けられた梵鐘を撞く。寺院の梵鐘のように撞棒は無く、木槌で撞く。参詣者は木槌を順次渡して撞いて行く。

梵鐘は千手院豪継（せんじゅいん）が文禄３年（1594）に玉屋般若窟に奉納寄進したものであったが、その後豊前領主毛利吉勝（もうりよしかつ）が追銘し、英彦山霊仙寺に奉納した。以後、奉幣殿横の鐘楼で松会など祭事に撞かれてきた。今は大晦日除夜や神幸祭の際に鐘が撞かれている。

午後 11 時 45 分頃に「英彦山神宮奉幣殿」で採火式があり、殿内で炬火（きょか）に採火すると、その火で宮司が柱松上部の松明に点火し、元旦午前零時の合図とともに奉幣殿斎庭に集まった参詣者が一気に引き起こすという形に変わった。最後に四隅の綱元に笹竹御幣が付けられる。柱松は正月三日間境内に立てられ、正月詣での参詣者がお参りしている。

斎庭に建てられた柱松

しめ縄が付けられた「梵鐘（県指定有形文化財（工芸品））」

柱松神事（柱松起こし）

斎庭に建てられた柱松

（4）まとめ

万物の生成を祈り五穀豊穣、平穏を願うため、英彦山権現の御神体が移る御柱を斎庭に立てる柱松神事から松会は始まる。柱松神事は、梵鐘の鐘の音から始まり、奉幣殿の斎庭に建てられた柱松に浄火が灯されると、暗闇の中に奉幣殿が浮かび上がる。厳かな雰囲気のなか、新しい春に祈りを捧げ、平穏成就に合掌する人々の情景が歴史的風致を形成している。

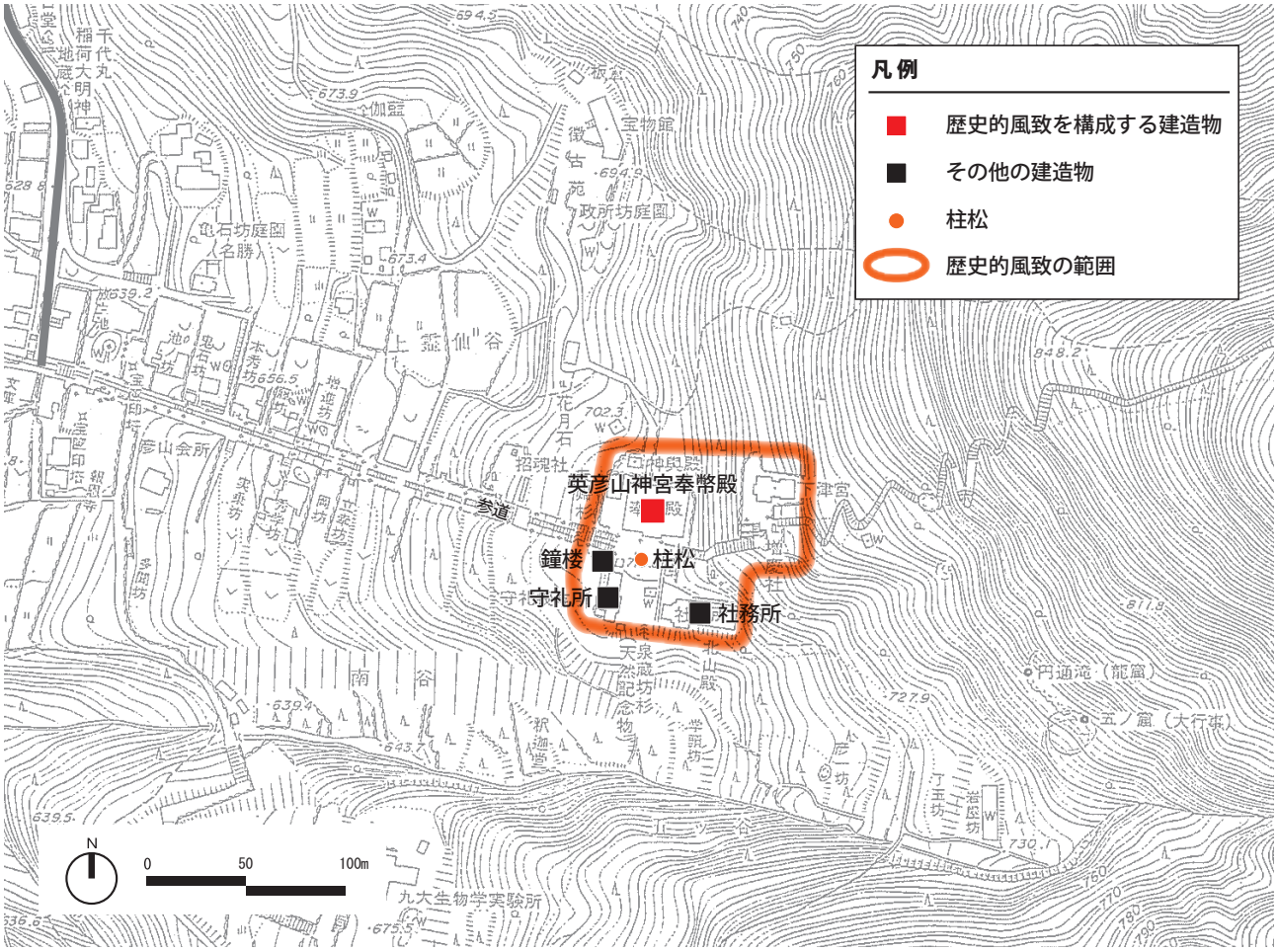

図　柱松神事にみる歴史的風致の範囲

１－２．御潮井採りにみる歴史的風致

（１）はじめに

英彦山神宮の御潮井採りは、往時英彦山最大の行事であった「勅宣度松会祈年祭」の前行として行われる行事であった。今も御田祭、神幸祭の前のお清めのため「山中祓い」をする神事である。

当番となった一行が、英彦山神宮を参詣したのち、道中で歓待を受けながら、徒歩で行橋市沓尾浜の姥ケ懐まで出向き、御潮井採りを行う。持ち帰った御潮井をもちいて参道の清め祓いをおこなう。

英彦山信仰の篤さを感じられる行事である。

（２）歴史的風致を構成する建造物

１）七大童子社

英彦山修験道の北坂本門口にある末社殿である。古来、英彦山秋峰葛城修行を守護する七童子を祀る堂として建立された。地元である北坂本地区によって営繕されてきたが、昭和 36 年（1961）焼失により宝殿は基壇のみとなっている。焼失後、翌年に入母屋造、銅板葺、二間規模の拝殿を再建した。拝殿奥に祭壇を設け、焼失を免れた祭神七大童子の尊像を祀り、11 月に坂本神社祭（童子講）が行われている。境内には安政年間（1855 ～ 1860）の石碑がある。

七大童子社

２）上津野高木神社

上津野高木神社の創建は、『津野高木神社明細帳訂正願』（明治 40 年（1907））によると、弘仁５年（814）に彦山開基四世羅運上人が彦山七口の各所に四十八大行事の大願を創出したとされる。彦山七口については、『太宰管内志』（天保 12 年（1841））に「上代、彦山に領じたり地には、其神社を建て限とす。是を七大行事ノ社と云。其今ものこれり。七大行事と云は、日田郡夜開郷林村の大行事、又鶴河内村の大行事、筑前国上座郡福井村の大行事、同郡小石原村の大行事、豊前国田川郡添田村の大行事、下毛郡山国郷守実村の大行事などなり。此社今も有て神官是を守れり」と記されている。高皇産霊神の託宣により七ツ石下胎蔵界不動坂付近に大行事神を安置し、瀧宮大行事社とされた。また本社英彦山の御潮井採りの霊場となり、「津野口大行事社」として祀られている。「高木神社棟礼」によると天保 15 年（1844）に小笠原右京太夫の寄進により造立したことが見え、その後改修が繰り返されてきたと推測されている。

上津野高木神社

上津野高木神社拝殿内部

宝殿は桁行３間、入母屋造、銅板葺、向拝１間で麒麟妻飾、斗供など随所に江戸後期の彫刻が残る。拝殿は桁行５間半、梁間２間半、入母屋造、瓦葺、向拝１間、納戸付で内部には江戸時代後期の天井絵が残る。

３）下津野高木神社

下津野高木神社は、『津野高木神社明細帳訂正願』（明治 40 年（1907））によると、英彦山四門のひとつ津野峠大行事殿として、弘仁 13 年（822）に彦山羅運上人が創立したとされる。宝徳年間（1449 ～ 1452）中に、津野峠から正護山に移されたというが、『添田町史』（平成４年（1992））によると、昭和 40 年（1965）の油木ダム建設に伴い、荒堀高台に移設された。『添田町誌』（昭和 34 年（1959））には、移設前の古写真が掲載されている。

下津野高木神社

社殿は切妻造、瓦葺で、ダム建設に伴い新築された建築物であるものの、移設以前の下津野高木神社の内陣が移築されている。御旅所（拝殿）は桁行４間、梁間２間、切妻造、向拝１間で、社殿と同様に移設前の拝殿の部材が再利用され、内部には大行事社の額や蟇股、斗供、天井絵、木鼻（象鼻）などの江戸時代後期の彫物が残されている。

４）英彦山神宮銅鳥居（文化財名称：英彦山神社銅鳥居、重要文化財（建造物））

英彦山神宮銅鳥居は、参道門前を結界する英彦山神宮大門筋入口に位置する。鋳銅製の鳥居で柱間心々約 6.0 メートル、地盤面より貫下まで約 4.5 メートルで、柱は青銅製の円筒六個を積み重ね、中央部の総高は約 6.76 メートルである。貫は青銅製で３片組み合わせとなっており、島木の反りは柱より外に出た部分のみで、形式は明神鳥居である。左柱には「願主　従四位下行侍従鍋島信濃守藤原朝臣勝茂敬白」、右柱には「寛永第十四丁丑年八月吉日」などと刻まれた「文禄の役」で朝鮮被虜人として連れてこられ、勝茂の右筆となった洪浩然の筆になる銘文があり、英彦山信仰の象徴として、寛永 14 年（1637）に佐賀藩主鍋島勝茂が奉納寄進したことがわかる。一説によると、もとは現在の富士屋旅館付近にあり、門前の拡大とともに貞享３年（1686）に現在地へ移したといわれている。その際に、円筒を各１個はずしたため総高が低くなり、全体的にずんぐりとした形になったとも言われている。この鳥居前の広場を「勢溜」といい、参詣者の溜まりとなった場所で、「下乗石」が示すように、ここで籠、馬をおり、徒歩で参詣した。また、参詣者の道案内と不浄のものが入らぬよう「点合護法」神が傍らに祀られ守護している。鳥居正面中央の島木と貫の間に金文字の「英彦山」の額が掲げられている。この額は享保 19 年（1734）

英彦山神社銅鳥居（重要文化財）

点合護法神

に霊元法皇が下賜したものである。勅額の上部横幅は約２ｍ、高さが約 2.4 ｍ、下部横幅が約 1.3 ｍの大額で、額縁には８箇の菊花御紋章を配し、「英彦山」の３文字は一乗院ノ宮の御清書を象ったものである。記録によると、天明３年（1783）に修理されている。また、鳥居は昭和 27 年（1952）に破損した島木や笠木等の銅板の張り替えが行われ、同 44 年（1969）には解体修理が行われている。

鳥居に掲げられる「英彦山」の額

５）英彦山神宮参道（町道１号）

英彦山神宮奉幣殿から英彦山神宮銅鳥居を結ぶ参道は、かつて興隆した英彦山修験道の往時の面影をよく保っている。『明治初年坊中屋敷図』(明治初年)をみると、周辺の宿坊とあわせて、参道の位置・形状が保たれていることがわかる。現在も多くの参詣客が訪れ、また、英彦山神宮にまつわる各種祭礼の舞台ともなっている。

英彦山神宮参道

表　そのほかの歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

	建造物名	掲載ページ
1	英彦山神宮奉幣殿	２－５
2	英彦山神宮下宮	２-20
3	旅殿	２-26
4	英彦山神宮上宮	２-79

（３）歴史的風致を構成する活動

１）御潮井採り

『彦山諸神役次第』（文安２年（1445））によると、旧暦１月 14 日の松盛座で当役を決め、26・27 日から晦日（みそか）にかけて、今川（いまがわ）、祓川（はらいがわ）流域の九里八丁（36km）の道程を辿り、行橋市沓尾浜の姥ケ懐へ出向き御潮井採りを行う。『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801））にその様子が示されていることからも、室町時代には行われていた。正月晦日に持ち帰った「御潮井」によって山内一円の清め祓いがなされると、２月朔日（さくじつ）には松会注連（まつえしめ）おろし、２月５日に舞楽、８日に松会ならし座が持たれ、11 日から三日間の増慶御供（ぞうけいごくう）、そして 13 日には大講堂庭前に巨大な柱松が立てられ、14 日から二日間にわたる松会を迎える、という流れであった。江戸時代に著された『吉書集義（きっしょしゅうぎ）』（天保年間（1831 ～ 1845）頃）には「潮井下之事」として詳細な規式が記されている。昭和 40 年（1965）頃の御潮井採り道中や貝伏せの様子を示す古写真が残されている。

図　松盛当役受杯『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

昭和 40 年（1965）頃の御潮井採り道中の様子

昭和 40 年（1965）頃の貝伏せの様子

現在も２月 14 日に松盛座で当役を決め、２月末日から３月１日にかけて、英彦山神宮の神職２名と出仕３名からなる御潮井採りの一行５名が、白装束にわらじ履きといういでたちで、「英彦山神宮潮井採神使」の幟を手に社務所から出立する。一行は奉幣殿での参拝を済ませると英彦山神宮上宮、下宮への拝礼後、法螺貝を吹きながら参道の石段を下り、英彦山町へ向かい、御潮井採りの出立を知らせる。そして、七大童子社を参詣後、御潮井採りの一行は、上津野七ッ石道を下って上津野高木神社（旧彦山大行事社）、下津野高木神社を参拝する。

奉幣殿前にて英彦山権現へ拝礼する様子

幟を手に山中挨拶をして出立する様子

下津野高木神社を参詣後、御潮井採りの一行は本町を離れ、赤村地蔵の木の接待座（各集落で御潮井採りの一行が受ける歓待）の後は峠道に入り、道中第一とされる接待座が行われるみやこ町喜多良四宮八幡宮へ赴き祭典を執行する。この後、行橋市福原で饗応の後、夕暮れに地域の人々の炬火で今井市場まで向かう。道中では法螺を吹きながら門祓い、屋祓いを行う。今でも「英彦山やんぶしさん」がいらしたと迎え、無病息災として「貝伏せ」といって法螺吹奏後、頭に法螺貝をかぶせてもらう、お礼に法螺貝に賽銭を入れるといったことが行われている。今井市場（熊野神社御旅所）での接待座の後、提灯を提げた今井市場の人の案内で、「今井の宿奥家」へと着く。

今井宿では二手に分かれて宿入りする。これは古来より英彦山神事が「色衆・刀衆」といった陰陽によって執り行われていたことによるようで、２軒の「奥家」が決められている。この際、両家では陰陽合体を意味する「入れ違いの儀」が行われ、しめ縄を張った桶の中にお神酒１本、潮吹貝２個を奉書に包み、箱に入れて取り交わす神事がある。宿では英彦山神宮の御神号が掲げられた床の間に供物が安置され、神前祓いが行われる。その後英彦山から持参した「音物」（木札、宝印など）が両家に贈られる。深夜、沓尾浜まで向かうが、宿人が提灯を掲げ今井大橋まで見送る。この後は深秘とされ、何人も見てはならないと伝え、「見たものは目がつぶれる」といって、道筋の人家は戸を閉ざし、垣間見ることも許されない。一行は姥ケ懐まで行き、禊を行い２尺ほどの竹筒に潮を汲んで宿へと持ち帰る。

入れ違いの儀

沓尾浜姥ケ懐御潮井場（福岡県行橋市）

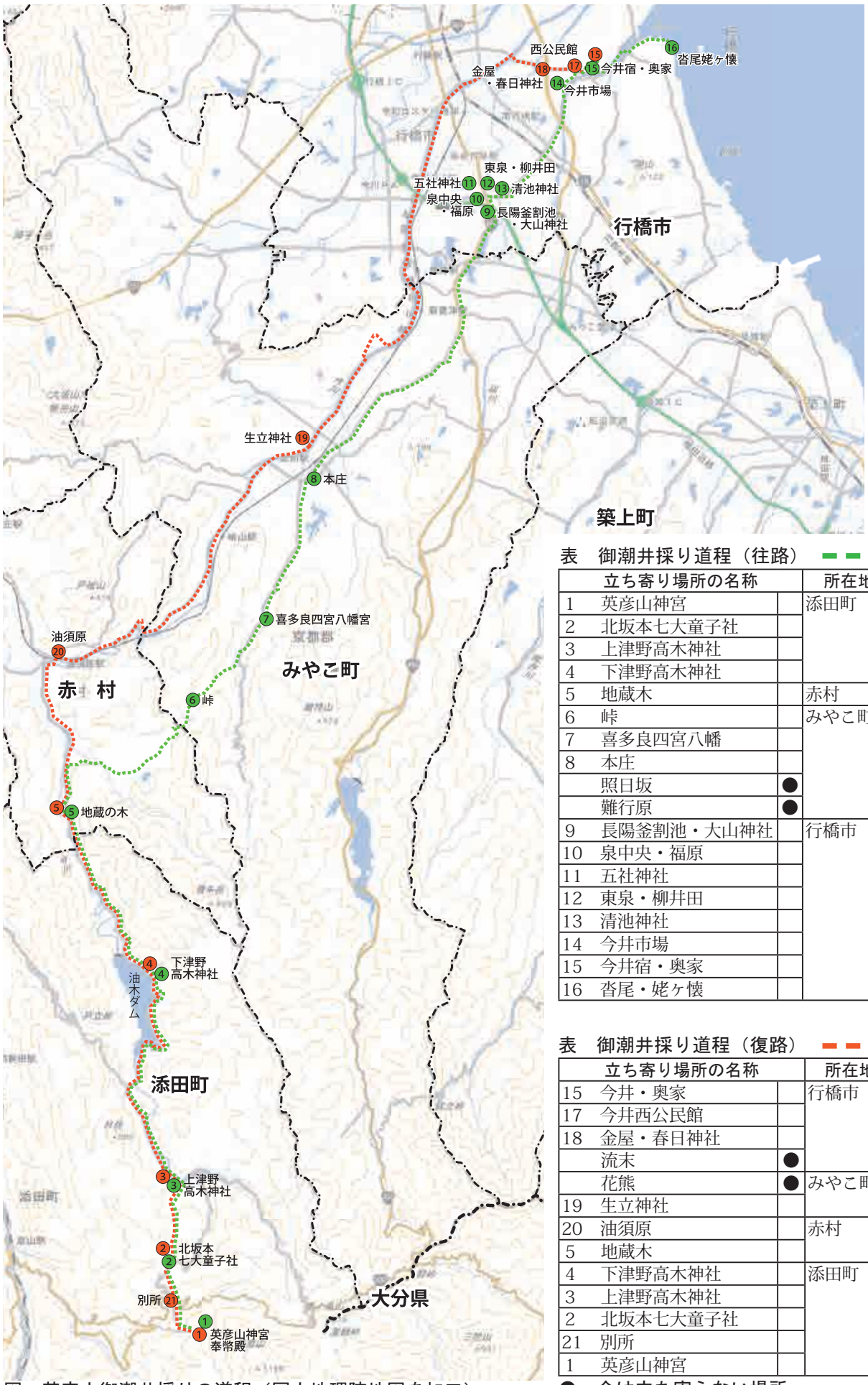

図　英彦山御潮井採りの道程（国土地理院地図を加工）

表　御潮井採り道程（往路）

立ち寄り場所の名称			所在地
1	英彦山神宮		添田町
2	北坂本七大童子社		
3	上津野高木神社		
4	下津野高木神社		
5	地蔵木		赤村
6	峠		みやこ町
7	喜多良四宮八幡		
8	本庄		
	照日坂	●	
	難行原	●	
9	長陽釜割池・大山神社		行橋市
10	泉中央・福原		
11	五社神社		
12	東泉・柳井田		
13	清池神社		
14	今井市場		
15	今井宿・奥家		
16	沓尾・姥ヶ懐		

表　御潮井採り道程（復路）

立ち寄り場所の名称			所在地
15	今井・奥家		行橋市
17	今井西公民館		
18	金屋・春日神社		
	流末	●	
	花熊	●	みやこ町
19	生立神社		
20	油須原		赤村
5	地蔵木		
4	下津野高木神社		添田町
3	上津野高木神社		
2	北坂本七大童子社		
21	別所		
1	英彦山神宮		

●：今は立ち寄らない場所

翌朝、今井西公民館で祭典を行い、金屋・春日神社に向かう。ここの接待座では「きなこ餅」などが振舞われ、ここで「潮井玉」とよばれる土産の蛤、潮吹貝、わかめなどを受け取り、往路と一部経路を変えながらみやこ町「生立八幡宮」へと向かい、赤村油須原で接待座の後、復路をたどり、津野高木神社へと戻ってくる。津野高木神社以降の接待を「サカ迎え」と呼んでいる。これは「酒」、「境」の意味に捉えられ、神使を労い村境まで迎え、接待したことに由来すると思われる。一行は英彦山神宮に帰着し、「潮井玉」と「潮井」を神前に供えて行事が終わる。

接待座前の貝伏せの様子

接待座の様子

金屋春日神社での祭典

上津野高木神社サカ迎え

翌日、持ち帰った「潮井」で門前山中祓いを行う。門前山中祓いは、英彦山神宮銅鳥居から石段を英彦山神宮奉幣殿まで上りながら、全ての辻で祓い行われる。祓いでは潮井採りで汲んできた海水を用いる。湯呑程度の器に入れた海水を小さな榊葉で周囲にまき、法螺貝を吹く。これを繰り返しながら奉幣殿に至り、奉幣殿前の石鳥居前で同様の祓いを行って山中祓いは終了となる。門前坊中の門祓いも同様に行い、坊家の人々は清め祓いを受け、持ち帰った「潮井玉」を受取り、神前にお供えする。この後、英彦山では３月 15 日の「御田祭」、４月の「神幸祭」の祭の準備へと取り掛かる。

山中祓いの様子（３月２日に神宮から下りながら清め祓いを行う）

図　御潮井採りにおける門前山中祓いの箇所（『明治初年坊中屋敷図』（山本通「英彦山勤王家遺蹟の調査」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第七輯（昭和７年（1932））から引用）に追記）

（4）まとめ

英彦山神宮の御潮井採りは英彦山権現が山から下り、沓尾浜で禊祓いをして山と海を融合させた。御潮井道中の村々は、「英彦山やんぶしさん」の法螺の音を聞くと春田を鋤き「田植え」準備に取り掛かり、今でも豊前「京都（みやこ）平野」の春迎え行事となっている。冬空の厳しい寒さが残る中、５名の御潮井採り一行が九里八丁の道程を往来し、神社を神事参詣したり、持ち帰った御潮井で銅鳥居をはじめ門前山中を清め祓いする様子は、今なお権現信仰が強く息づく歴史的風致を形成している。

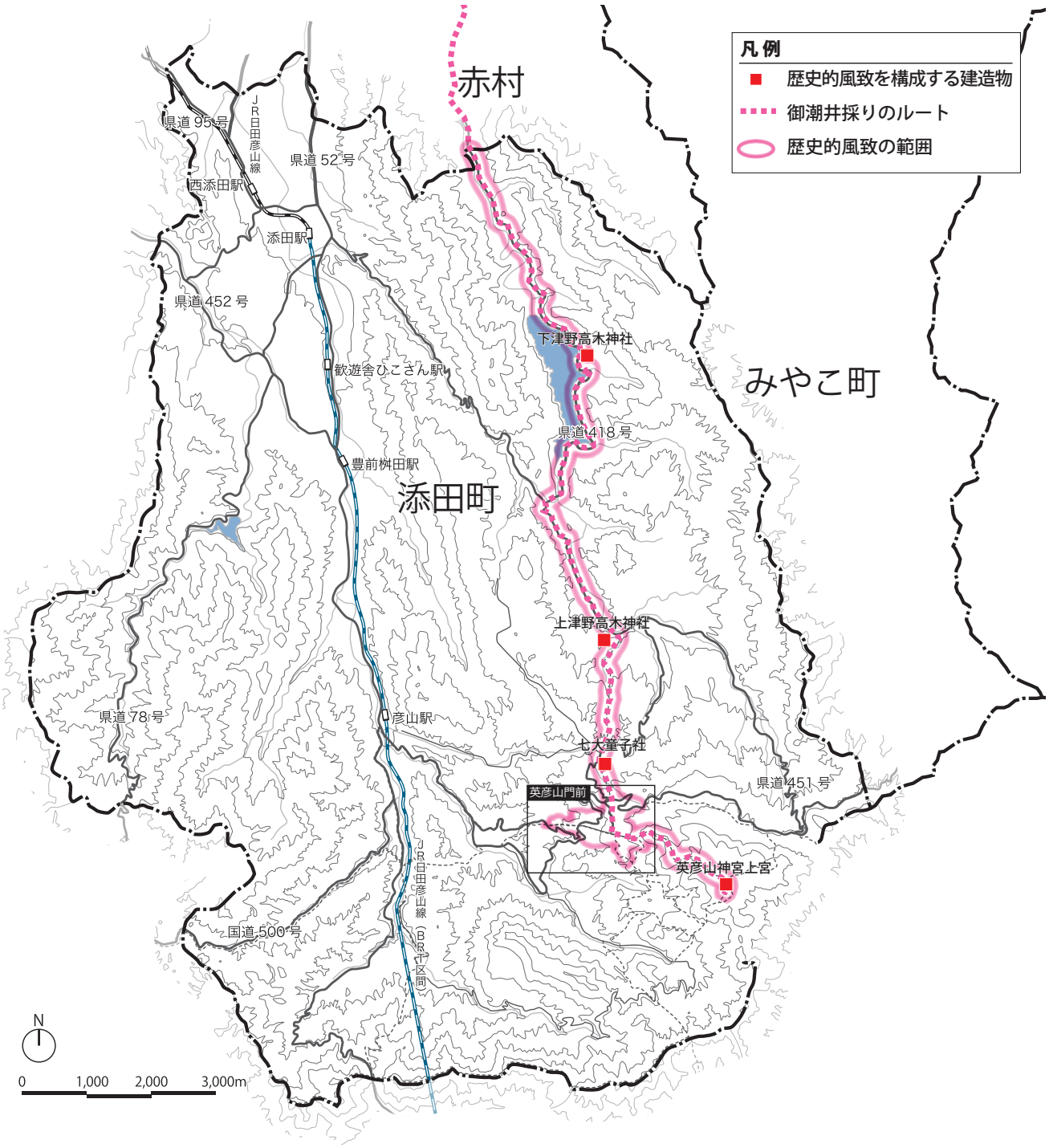

図　御潮井採りにみる歴史的風致の範囲

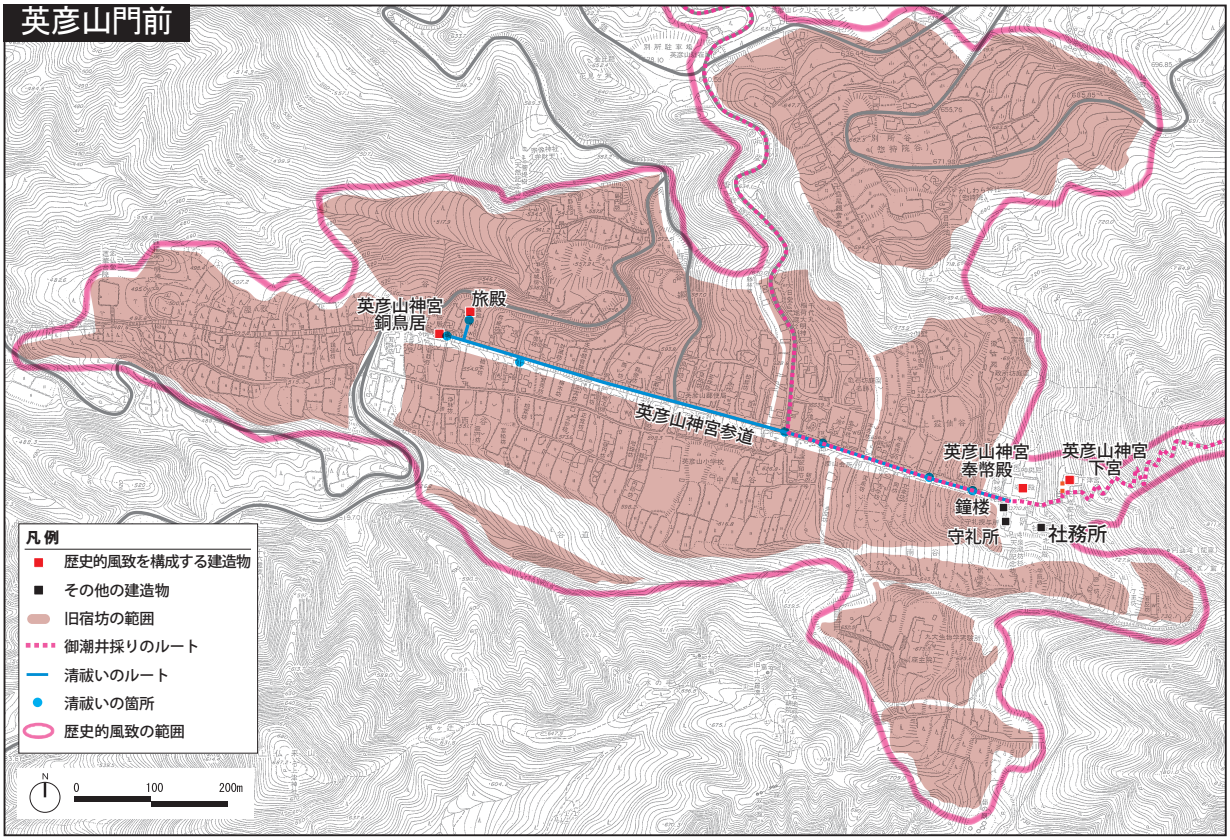

図　御潮井採りにみる歴史的風致の範囲（英彦山門前詳細）

１－３．御田祭にみる歴史的風致

（１）はじめに

御田祭は松会の最後に執り行われる行事で、江戸時代までは旧歴２月 15 日に神輿（みこし）の還幸が行われ、神輿が斎庭に到着して神輿休めに安置されると、御田司が田植えの所作を英彦山権現に奉納して五穀豊穣を祈願する予祝行事であった。

明治以降は、英彦山神宮の行事として続いており、多くの参詣者に囲まれるなかで、奉幣殿前の斎庭において、田植えの所作による一連の行事が豊作の祈りとともに行われている。

（２）歴史的風致を構成する建造物

１）英彦山神宮下宮（ひこさんじんぐうげぐう）

英彦山神宮下宮

英彦山神宮下宮は、英彦山中腹、奉幣殿すぐ上の平地に鎮座している。『彦山流記』（鎌倉初期）には「当山下宮者、（中略）宝殿拝殿各八間檜皮葺、三所権現　白山　大行事　玉屋　大南　智室　鷹栖　北山　正體金銅像　皆安置彼社檀」とあり、そのほか中宮、竹台権現（豊前坊（ちくだいごんげん　ぶぜんぼう））を加えた12 社の祭神所謂彦山十二社権現（いわゆるひこさんじゅうにしゃごんげん）を祀っている。彦山流記に見える社殿は永禄 11 年（1568）に焼失し、以後慶長 10 年（1605）に再建された。中世の建築物は社殿、拝殿とも８間規模の壮大なもので、桁行では現在の奉幣殿を凌ぐ規模であったことがわかる。棟札によると、現在の建築物は安政４年（1857）に建替えが行われたものであり、社殿三間社流造、銅板葺の建築物で、幣殿から拝殿と続く。拝殿は桁行５間、梁間２間、切妻造、銅板葺である。神幸祭でその十二社権現の御神体が３基の神輿によって旅殿まで渡御還幸するとしめやかに御田祭が執り行われる。

表　そのほかの歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

	建造物名	掲載ページ
1	英彦山神宮奉幣殿	2－5

（３）歴史的風致を構成する活動

１）御田祭

古来、御田祭は下宮に奉祀された英彦山十二所権現に奉納する神事であったことから前日の３月 14 日に英彦山神宮奉幣殿前に下宮方向を正面として四方に笹竹を立て、しめ縄を張って約 15.6 坪の御田を作ることから始まる。文安２年（1445）の『彦山諸神役次第』（文安２年（1445））によると、室町時代には旧暦２月 15 日に行われていたことが見える。

江戸時代の『吉書集義』では旧暦２月 15 日にお上りの神輿が神輿休めに還幸すると「祈年御田祭」として執り行われていたことが記され、祭りの様子は寛政４年（1792）の英彦山安住院本を模写して平戸藩主松浦家が奉納した『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789～1801））に詳細に描かれており、往時の姿が容易に見て取れる。この御田祭は明治維新後に英彦山神宮の祭事として月遅れの３月 15 日に執り行われるようになった。奉幣殿昭和大

改修が行われた昭和８年（1933）には下宮の境内で御田祭が行われた写真が残されている。

御田役である氏子総代は前日の３月 14 日に御田習礼（練習）を行う。当日３月 15 日の御田祭では 10 時半に社務所から出立する折に権禰宜が社務所横の龍神の滝から汲んだ水を桶にいれ、柄杓で宮司、祭員、総代御田役の手や口を清める「手水の儀」を行った後、奉幣殿へ向かい、内殿での修祓後祭員神官が御田祭具、斎田を清め祓い、その後一同が斎庭に降りて行事が始まる。

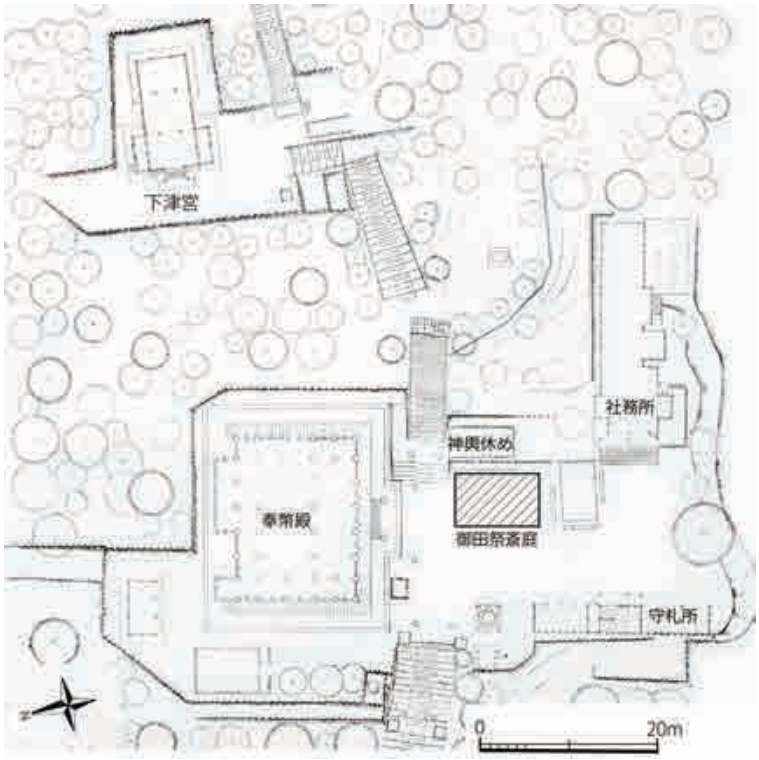

図　御田祭斎庭位置

御田行事は、「鍬入れ」、「畦切り」、「田打ち」、「畦塗り」、「馬杷」、「杁」、「種子まき」、「御田植え」、「飯戴、汁戴」、「早乙女の舞」の順序で行われる。

「鍬入れ」は、御田役１人がサカキ・ユズリハ・松枝を一束にした神捧を持ち、鍬を肩に担いで上宮を拝礼し、その束を地上に置いて鍬で土をかける所作をする。その折、神職により、「国土のひろき荒野を田になして鍬のみほこにつゆの玉よね」の御神歌が歌われる。

「畦切り」は、御田役１人が鎌を持ち、御田の四隅で畦の草を刈る所作をする。

「田打ち」は、御田役数名が一列に並び、後にさがりながら、鍬で田を耕す所作をする。

「畦塗り」は、御田役１人が鍬を持ち、御田の四隅で田の畦を塗り固める所作をする。

田打ち行事の様子

図　田打ち行事
『英彦山大権現松会之図』
（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

「馬杷」は、田を鋤(す)き均(なら)す所作で、御田役２名が木製の牛を引き、ほか１名がその後ろに馬杷を持って続き、斎庭を一巡する。その際、神職により、「塊をなおこまやかに砕けとて教えの馬鍬(まぐわ)に八束穂(やつかほ)の稲」の御神歌が歌われる。

「杁」は、御田役１人が杁を持ち、四隅で田をかきならす所作をする。

馬杷行事の様子

図　馬杷行事『英彦山大権現松会之図』
（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

馬杷の様子（昭和８年（1933））

「種子まき」は、御田役１人が三方に載せられた種籾(もみ)を斎田の四隅に蒔く。そのとき御神歌が入り「彦の高嶺に五穂(いつほ)の御種(みたね)子、手にぎりみたからの仕業(しわざ)教えし忍穂根(おしほね)の初のみふゆをあおがれて、尊(とうと)みまつれ四方(よも)の諸人(もろびと)」と歌われる。

『英彦山文書』には「籾種子一石ヲ献備」、「此ハ古来慣行二依テ御田植始二種子蒔行事ヲ修シ、各々種籾ヲ拝受シテ諸国参詣講社社員ヨリ信徒へ分配シテ、例之種子浸二指加へ、年穀ノ繁殖豊熟ヲ祷ル習アリ」ということから、一石（150kg）もの籾種を用意し、代参者が村内に持って帰り、九州一円の信者に配り、自家の神前に供えたり、種籾に加えて豊作を祈って植えたことがわかる。参拝者はこの籾種をもらって豊作の守護とする。

種子まき行事の様子

種子まき行事の様子（昭和８（1933）年）

図　種子まき行事『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

「御田植え」は、御田役７人が一列に並んで、早苗にみたてた７把（は）の石菖（せきしょう）の葉を足もとに並べて植える所作を行う。７人の御田役が１人７把を植え、合計 49 把の苗が斎田に植えられる。この際、御神歌が入り「年の初めに空みれば時しる雨の降るにつけ、種子まき田植え忍穂根の神のおしえのふることを、今にまぬびて二月（きさらぎ）の彦の祭りに初めそめけり」と歌われる。この石菖の葉は、参詣者がもらって自家の神前に供えて豊作を願う。

田植行事の様子（昭和８年（1933））

図　田植行事『英彦山大権現松会之図』
（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

「飯戴、汁戴」は、種子まき行事が終わるころ、御田上臈（じょろう）といわれる女役が手ぬぐいで頭を「姉さん被り」にし、着物のおなかを膨らませた妊婦姿で現れる。頭には飯を盛った御椀を入れたはんぎり（浅い桶）を乗せている。この妊婦役が登場する意味は、稲穂の実”みのり”を子供を授かることに例えて用いられている。頭の上の飯を食べると無病息災になるということから、この妊婦役の演者が御田斎庭脇に座ると、観衆は競って戴こうとする。戴いたこの飯は、自家の神前に供えて豊作を願う。

飯戴の様子

競ってはんぎりから御飯を戴く人々

このほかに、現在は行われていないが、『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789～1801）には汁戴の様子が描かれている。

図　飯戴、汁戴
『英彦山大権現松会之図』
（寛政年間（1789～1801）、
英彦山神宮所蔵）

「早乙女の舞」は、明治期に取り入れた神事で、女児が絣の着物に黄色の帯を締め、赤のたすき、緑の手甲・脚絆、白足袋にわらじをはき、手ぬぐいを頭にかぶり、菅笠（すげがさ）を持って舞う。舞うときに「早苗とるしずが菅笠いにしえの手振りおぼえてなつかしきかな」と歌う。なお、この歌詞は、明治天皇御製で、昭和３年（1928）の昭和天皇即位御大典記念の際に各地で舞われた。

早乙女の舞

（４）まとめ

御田祭は田植え神事として佐賀や大分、福岡筑後（ちくご）地域の穀倉地帯農村部を中心に権現講や代参講として参詣者が多く来山している。奉幣殿の境内に注連縄で田に見立てて形作られた斎庭は、山中の静けさとわずかな日の光が注がれ、そこで行われる田植えの所作は多くの参詣者の熱い視線が注がれている。参詣者は種子まき行事の種籾や飯戴の御飯、田植え行事の苗に見立てた「石菖」をもらい、ともに自家の神前に供えて豊作を願う。現在も田植え前に英彦山詣でを行い、英彦山権現に豊作祈願をする情景により、歴史的風致が形成されている。

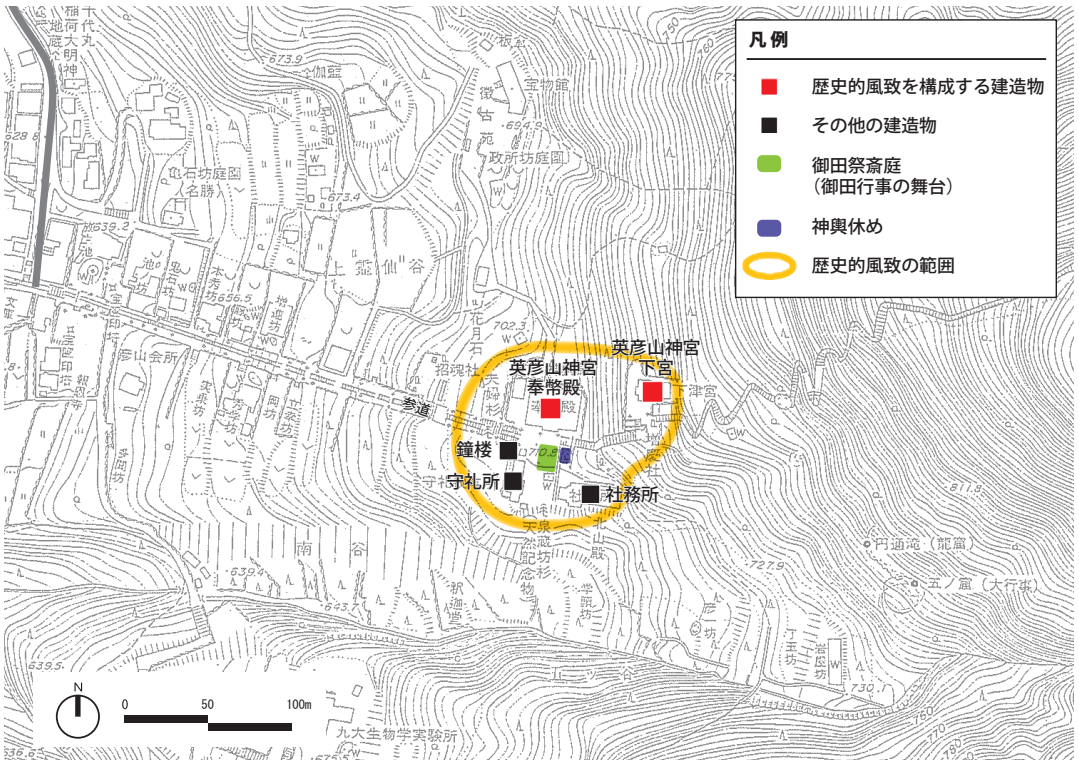

図　御田祭にみる歴史的風致の範囲

１－４．神幸祭にみる歴史的風致

（１）はじめに

英彦山神宮の神幸祭は平安時代に増慶上人が創始し、彦山十二社権現が「下宮」から御幸する祭礼として行われた。『彦山諸神役次第』（文安２年（1445））には正月 14 日松盛座で当出仕が決まると旧暦２月 14、15 日に執り行われたことが見える。現在は２月 14 日に松盛座で当出仕を決め、４月中旬の土曜日、日曜日の２日間にわたって執り行われている。

神幸祭は、英彦山神宮奉幣殿前から大門筋銅鳥居の北側横にある御旅所まで、門前参道を２日間にわたって３基の神輿が往来する。その際、稚児舞や鉞舞、獅子舞、流鏑馬が奉納される。

（２）神幸祭に関わるまち並み（英彦山門前坊舎群）

神輿が渡御還御する参道沿いには、県指定有形民俗文化財である財蔵坊や楞厳坊、国指定名勝の顕揚坊や古式坊舎の増了坊、松養坊、浄境坊などが立ち並んでおり、参道に面した棟門の奥に祈祷道場と宿舎を兼ねた「客殿」と日常生活の場「内證」を鍵屋で繋いだ坊舎、客殿前に配された庭園が往時をしのばせる。坊舎とは山伏法師として僧団に一定の資格を認められた僧を師とし、その弟子たち、労役に従事する下級の僧、俗体の下男下女までを含めた小組織の本拠となる場所であった。また山伏法師を導師として英彦山に結縁した下界の信者たちが本山に参詣したときには、加持祈祷の場となり、また農家の信者たちには珍しい料理や酒の馳走が振る舞われる場所でもあった。

宿坊をはじめとする建造物の概要や建築年代については、『平成 25 年度英彦山建造物調査』（平成 26 年（2018）改訂、㈱河上建築事務所）、『英彦山総合調査報告書』（平成 24 年（2016）、添田町教育委員会）、『英彦山伝統的建造物群保存地区調査概要』（昭和 53 年（1978）、福岡県・添田町）等にまとめられている。

昭和初期の英彦山門前坊舎群

参道の様子

参道からみた宿坊の様子

（３）歴史的風致を構成する歴史的建造物

１）旅殿（りょでん）

神輿がお下りになる旅殿は、下宮（しもみや）彦山十二所権現の御旅所で、神幸祭神輿が御幸する場所である。旅殿については建築物の東南脇にある石碑に「奉造営彦山権現御旅殿并寳道」と有り、文禄２年（1593）の造営銘が初見である。以降、英彦山神社記録には正保２年（1645）、元禄３年（1690）に営繕されていることが判る。現行建築物は『西谷鎮花祭記録（にしだにちんかさいきろく）』（明治 12 年（1879））から、明治 12 年（1879）に再建されたことがわかり、規模は桁行４間、梁間３間、入母屋造、麦藁葺、正面吹放ちの建築物で、昭和 50 年（1975）に鉄板葺にした。旅殿敷地東にはひょうたん形をした古式庭園があり、庭園を背景に祭事が勇壮に執り行われていたものと思われる。

旅殿

旅殿造営石碑
（文禄２（1593）年）

２）松養坊（しょうようぼう）

松養坊は、天正 15 年（1587）の記録以来、元禄の頃まで天台系の衆徒方に属し、後に神道系の惣方も勤め、幕末には峰入の大先達（だいせんだつ）となる行者方であった。明治維新の神仏分離後に神職となった。明治７年（1874）の調査では、3,432 軒の檀家を所持していた。敷地は、大門筋沿の下宮寄りに位置し、敷地南西側に薬医門がある。建築物は、大門筋側の客殿、広間、住居部分からなる二矩折型である。客殿は、大門筋に対して平行であり、北に泉水のある庭がある。建立年代について、『英彦山総合調査報告書』（平成 24 年（2016））では、嘉永 5 年（1852）銘の御神札（おふだ）箱があり、それ以前の文政～天保頃（1818 ～ 1844）の建立と推定されている。

松養坊

３）財蔵坊（ざいぞうぼう）（県指定有形民俗文化財）

財蔵坊は、衆徒方（天台系）であり、如法経会や釈尊誕生会などを担当する天台・修験兼帯の坊であった。敷地は、大門筋沿の西寄りに位置し、入口が敷地西隅にある。「貞享 3 年（1686）、財蔵坊より出火し西谷が焼ける」と示される文献があり、かつて西谷にあったとされる。建築物は、客殿、広間、住居部分からなる二矩折型である。建立年代は 19 世紀後期頃と考えられる。昭和 49 年（1974）に本町が買い取り、修理されて民俗資料・生活用具の資料館となった。同 52 年（1977）に「英彦山資料」として県の有形民俗文化財に指定された。

財蔵坊

4）浄境坊（じょうきょうぼう）

座主（ざす）家である高千穂（たかちほ）家は、天正９年（1581）に現、朝倉市の黒川院（くろかわいん）から南谷華蔵院（けぞういん）に座主院を移した。その後、明治７年（1874）８月の大風雨により損害を受け、行者方である浄境坊の家屋敷を買い取り、現在に至る。浄境坊の敷地は、大門筋の西寄りに位置する。大門筋沿い、敷地西隅の入口に棟門、旧座主院の庭門を移したという薬医門がある。２棟の門の存在からも格の高さがうかがえる。建築物は客殿、広間、住居部分からなる二矩折型である。『英彦山伝統的建造物群保存地区調査概要』（昭和53年（1978））によると、建立年代は、高千穂家が移動した明治７年（1874）に建設された可能性が指摘されている。

浄境坊

5）楞厳坊（りょうごんぼう）（県指定有形民俗文化財）

楞厳坊は、行者方である。前身建築物は、寛永14年（1637）の銅鳥居と同時期という口伝があり、また貞亨３年（1686）の火災後の大門筋整備の初期からあったという。敷地は、大門筋沿いの西寄りに位置する。間口の広い入口は敷地西隅にある。客殿南側には枯山水がある。建築物は、大門筋側の客殿、広間、居住部分からなる矩折型であり、客殿が大門筋に対して平行である。建立年代は、文政４年（1821）に没した權大僧都公珍（ごんのだいそうづこうちん）の代にできたと伝えるが、それは現存しない部分に該当し、客殿は天保から弘化の頃と推測されている。平成３年（1991）に「英彦山楞厳坊修験資料」として県の有形民俗文化財に指定された。

楞厳坊

6）増了坊（ぞうりょうぼう）

増了坊は、行者方（修験系）であり、政所坊（まんどころぼう）、亀石坊（かめいしぼう）とともに有力な大先達であり、佐賀藩鍋島（なべしま）家の宿坊であった。敷地は、大門筋沿の中程に位置し、広さ約 2,000 ㎡の敷地の西隅に入口があり、薬医門と天和２年（1682）の刻銘のある石灯籠がある。建築物は、大門筋側の客殿、広間、住居部分からなる二矩折型であり、客殿が大門筋に対して平行に位置する。明治初年の火災後に亀石坊もしくは政所坊から移築したと伝えられているが、単なる移築ではなく、複数の部材が混用されたと伝えられている。

増了坊

7）顕揚坊（旧秀学坊跡）

顕揚坊は、惣方（神道系）であり、神道・修験兼帯の家系であった。

敷地は、大門筋沿いの下宮寄りに位置する。入口は敷地西隅にあり、銅板葺の棟門がある。この地には、かつて秀学坊が存在したが、明治初年に消失した後、南に隣接していた顕揚坊が移った。建築物は、客殿、広間、内証（奥の間）からなる二矩折型であり、客殿が大門筋に平行となり、大門筋側に国指定の名勝の伝雪村作庭園がある。『英彦山総合調査報告書』（平成 24 年（2016））では、建立年代は天保から弘化頃と推測されている。

顕揚坊

8）勝円坊

勝円坊は下谷道の北側に設けられた宿坊であり、『英彦山伝統的建造物群保存地区調査概要』（昭和 53 年（1978））によると、現在の客殿は慶応 3 年（1867）に建てられたものである。

門に近い東西棟が客殿、直角に接続するひろま、さらに北に東西棟のいろりの間・台所・土間が続く。内證から台所にかけては厨子二階を設け居室とされている。

勝円坊

9）正応坊

正応坊は英彦山神宮銅鳥居付近の英彦山神宮参道に建つ入母屋造・瓦葺・二階建の建築物である。町の資料によると、昭和 20 年（1955）には存在が確認できる。

正応坊

10）旧亀石坊庭園（国指定の名勝・英彦山庭園）

画僧雪舟の作庭と伝わる池泉観賞式庭園であり、文明 9 ～ 14 年（1475 ～ 1481）頃の築庭とされる。国指定の名勝「英彦山庭園」を構成する庭の一つである。雪舟がこの地を訪れたかは定かではないが、弟子に「彦山家円坊等琳」という山伏がいたということで、雪舟と英彦山との関係がうかがえる。庭園の東側が一段高く、南西へ傾斜しているのを利用して築山をつくり、その山裾に池が掘られる。また、出島のかたわらに亀の甲羅を表現した亀石や鶴が首をもたげた姿の鶴石が据えられ、奥行の深い滝石など、配石が巧妙である。

旧亀石坊庭園

11）旧政所坊庭園（国指定の名勝・英彦山庭園）

政所坊は上谷最上段に位置する「曖坊」と呼ばれた座主血縁の坊家で、旧亀石坊ともに座主代を務める有力坊であった。敷地には旧亀石坊庭園と同様に大ぶりな配石を持つ池泉庭園が残されており、慶長年間（1596 ～ 1615）頃の築庭とされる。国指定の名勝「英彦山庭園」を構成する庭の一つである。

旧政所坊庭園

表　そのほかの歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

	建造物名	掲載ページ
1	英彦山神宮奉幣殿	2－ 5
2	英彦山神宮銅鳥居	2－11
3	英彦山神宮参道	2－12
4	英彦山神宮下宮	2－20

（４）歴史的風致を構成する活動

１）神幸祭

神幸祭の歴史は古く、『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801））にはその様子が詳細に描かれており、戦前においては昭和 10 年代（1935 ～ 1944）の様子を示す古写真が残されている。

神幸祭典の様子
（昭和 10 年代（1935 ～ 1944））

神輿のお下りの様子
（昭和 10 年代（1935 ～ 1944））

図　神輿行列『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

１日目のお下りは、午前 10 時に氏子総代が集まり神輿の飾り、御供岩にしめ縄を張って準備をする。12 時に一番鐘の梵鐘を鳴らし、12 時 30 分に二番鐘、午後１時の三番鐘の後、奉幣殿で内殿祭、神輿に御神璽（しんじ）を遷座をする御発輦祭（ごはつれんさい）、下宮横の御供岩に神飯を供え、御神鳥の鷹が啄（つい）ばむまで御発輦出来ないという故事から「増慶御供の儀」が執り行われる。２時、奉幣殿前で駕輿丁役が整列すると太鼓持の合図で壱ノ殿、弐ノ殿、参ノ殿と御発輦する。神輿の前には往時さながらに先導役の散使、御幣持、水王・火王持、旗持、傘持と続き、獅子持、鉞持が下って行く。

神輿御発輦祭の様子

太鼓持、旗持、水王・火王持のお下り

神輿お下りの様子

参道途中にある花山旅館や富士屋旅館付近の町溜（まちだまり）につくと、神輿休めが行われ、参詣者による神輿参拝が行われる。神輿休めでは女児による稚児舞が行われる。稚児舞は、白の着物に緋の袴をはき、萌黄色の狩衣を身にまとい、瓔珞（ようらく）とよばれる装身具をかぶり行われる。所作は、左手の鈴を振り、神職の叩く太鼓にあわせて三歩進んでは一呼吸立ちどまる。これを繰り返しながら、約３分間Ｓ字型に進むのである。『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789～1801））には、神楽役である彦一坊神楽が描かれており、その姿は先頭の女児に似ており、両手の持物も同じである。このことから、稚児舞は彦一坊神楽の名残と考えられる。

神輿休めでの稚児舞

御旅所での稚児舞

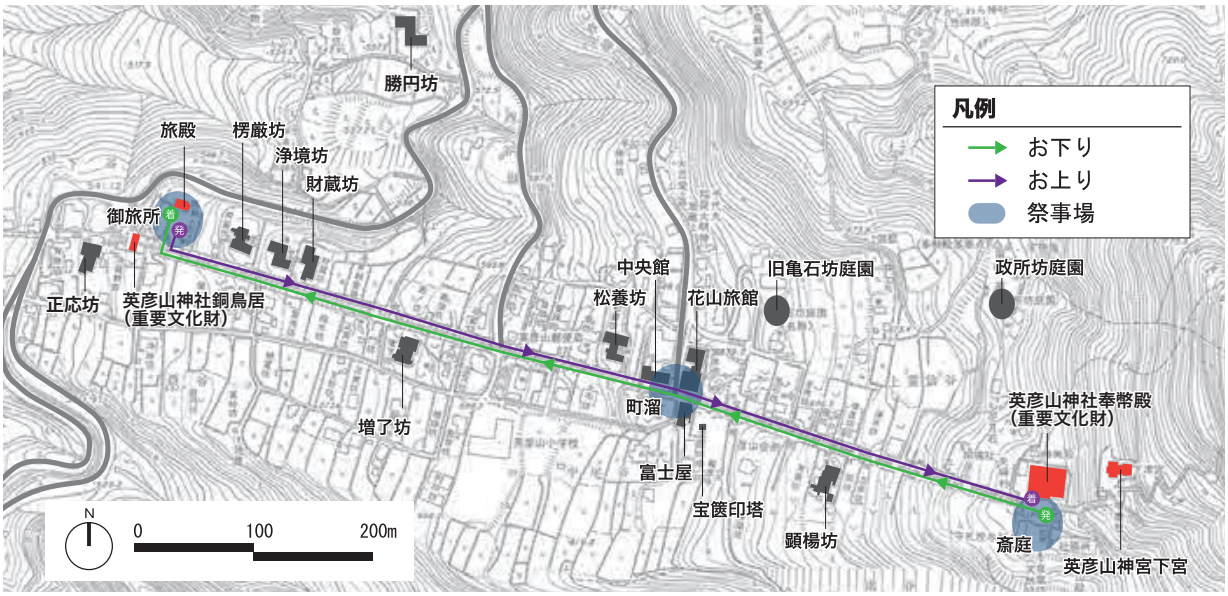

図　英彦山神宮門前町と神幸祭渡御還

神輿が御旅所に着くと旅殿に安置され、守護神である水王・火王面や御幣を柱に取り付けて、旅殿着御祭が行われる。その後、神前で稚児舞、獅子舞、鉞舞が奉納される。

旅殿では直会が行われ、神官と総代２名が宿直となる。

御旅所着御の様子

旅殿の神輿着座

鉞舞奉納

獅子舞奉納

翌日のお上りは、午前８時に宿直神官、総代により朝御饌祭（みけさい）が行われ、12 時に一番鐘、12 時 30 分に二番鐘、午後１時に三番鐘が撞かれる。１時 20 分から御還御発輦祭の後、２時にお下りとは逆に参ノ殿から御発輦になる。町口で神輿御駐輦があり、お下りと同様稚児舞が奉納される。

斎庭に神輿が着御すると神輿休めに安置され、獅子舞と鉞舞が奉納される。

図　神輿休め『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

獅子舞は、雌雄一対で胴には二人が入って舞い、古来は楽があったことが絵巻に描かれている。獅子頭は、筑豊（ちくほう）域に分布しているものよりずっと大きく、雄獅子は、横幅 55cm、高さ 45cm、重さ 35kg である。雌獅子はやや小さい。獅子頭に紺地横じまの布を胴にして、前立ちの衣装は白衣・白袴に白足袋である。

所作は、獅子頭の口を上にしたまま、神輿に頭を向けたりしながら場内を一巡する。二巡目は「おまねき」といって、神輿や宮司の前に来ると拝礼するように、肩に立てている獅子頭をお辞儀するような所作を見せる。その後、頭を振りながら口を大きく“ガッ”と開く所作を５回繰り返す。雄獅子が終わると雌獅子が入場して同じ所作を行う。奉幣殿前の最後の獅子舞は「三度がえり」という舞がある。雌獅子は舞い終わるとすぐ、下宮へ向かう石鳥居の石段をかけあがり、最後に山頂の方に向かって３回口を開き、咆哮（ほうこう）する舞を行う。これは、雄獅子が雌獅子を残して南方から渡来するとき、雌獅子が後を追う場面を表わしたものであり、狂ったように咆哮することから「名残の狂」と言われる所作である。

獅子舞の様子

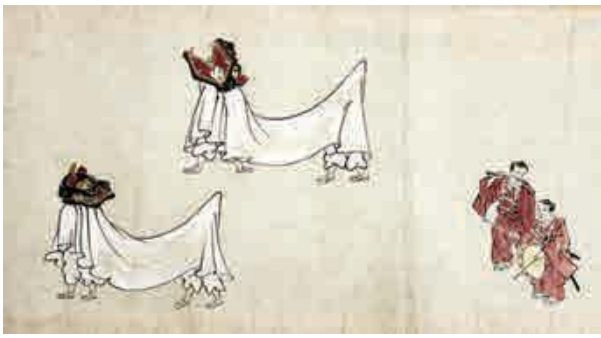

図　獅子舞『英彦山大権現松会之図』
（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

鉞舞は、白の上衣・袴の２人の演者が向かい合い、鉞を大きく振り打ち合う。その所作演目名は、10 番まであり、カタアゲ、キリメグリ、ワタシ、ハアワセ、ヒラアワセ、エアゲ、サンゴノイン、タタギリ、カキ、オイマワシの所作を行う。この中で、印を結び九字を切る所作をするサンゴノインに修験道の名残を見ることができる。このほかに、長刀の舞、金棒の舞などがあったことが絵巻に見られる。

図　鉞舞　『英彦山大権現松会之図』
（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

鉞舞の様子

鉞舞の様子（昭和 10 年代（1935 ～ 1944））

行事の最後には、流鏑馬が執り行われ、一連の神事が終わる。

流鏑馬は、氏子総代が騎手になり、烏帽子・狩衣姿で乗馬し、奉幣殿前広場の四隅で、1本ずつ空に向けて射る。人々は、矢を競って拾おうとする。

図　流鏑馬『英彦山大権現松会之図』（寛政年間（1789 ～ 1801）、英彦山神宮所蔵）

流鏑馬の様子

流鏑馬の様子
（昭和 10 年代（1935 ～ 1944））

（4）まとめ

英彦山松会の神幸祭では英彦山権現が出御し、還御すると御田祭により平穏安泰、豊穣が祈念された。旧宿坊の範囲である各地区を中心に人々が参加して、今でも、英彦山神幸祭は豊穣を祈念して英彦山権現を移した神輿が、宿坊や豊かな森林に囲まれる石段の参道を勇壮に上り下りする。その道程では、奉幣殿や旅殿の斎庭で軽やかな鈴音の稚児舞、優雅な獅子舞、凛として潔い鉞舞が奉納されており、今なお英彦山権現を讃える情景が受け継がれ、歴史的風致を形成している。

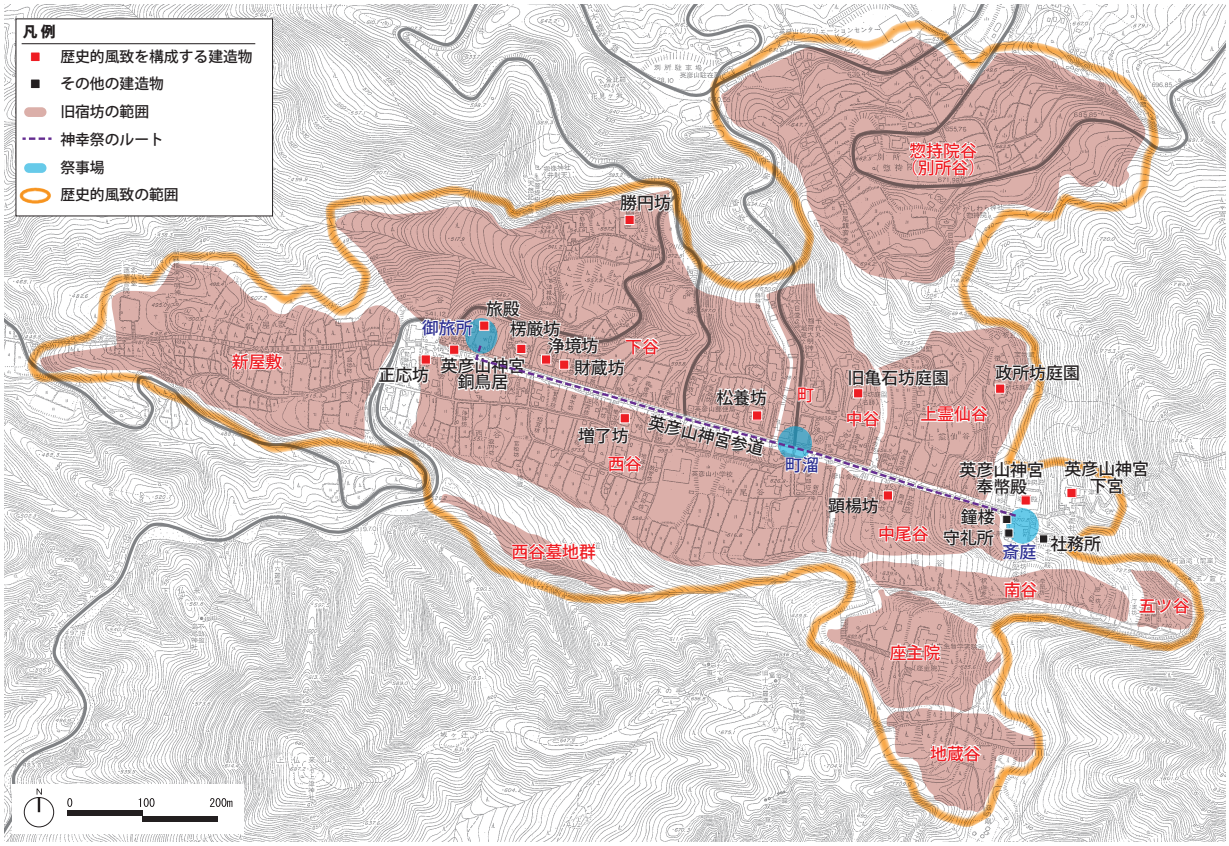

図　神幸祭にみる歴史的風致の範囲

Ⅲ．おわりに

かつて興隆を極めた英彦山修験道は、英彦山神宮銅鳥居から英彦山神宮奉幣殿を結ぶ参道とそれらをとりまく宿坊等の歴史的建造物から、往時の姿をしのぶことができ、その中で英彦山神宮にまつわる神事等の活動が現在まで続いてきた。

柱松神事では、年越しの宵に鐘の音が響く中で、火が灯された柱松が立ち上がる。新年を迎え、これから春の間に、英彦山神宮にまつわる神事が続くことになる。

御潮井採りは、御田祭と神幸祭の前のお清めとして行われ、当番が徒歩で行橋市の香尾浜まで潮を採り持ち帰る。行程の中で各地でもてなしを受け、英彦山神宮と各地域とのつながりを見ることができる。そして持ち帰った潮で門前山中を清める様子からは、権現信仰の息づきと続く祭りへの期待を感じることができる。

御田祭は、田植神事として九州北部を中心に広く参詣者を集める。田に見立てられた斎庭で行われる各種行事は田植えの所作にかかわるものであり、多くの参詣者が豊作を願う。

神幸祭は３基の神輿が二日間にわたり参道を往来するものであり、神輿を担ぐ人々の姿は勇壮である。御旅所、町溜の神輿休め、斎庭のそれぞれで獅子舞奉納や稚児舞等のきらびやかな催しや神事が行われ、五穀豊穣が祈念される。

これら一連の英彦山神宮にまつわる神事がつくりだす情景からは、英彦山大権現への篤い信仰と、英彦山の参道を軸に形成される歴史的風致を感じることができる。

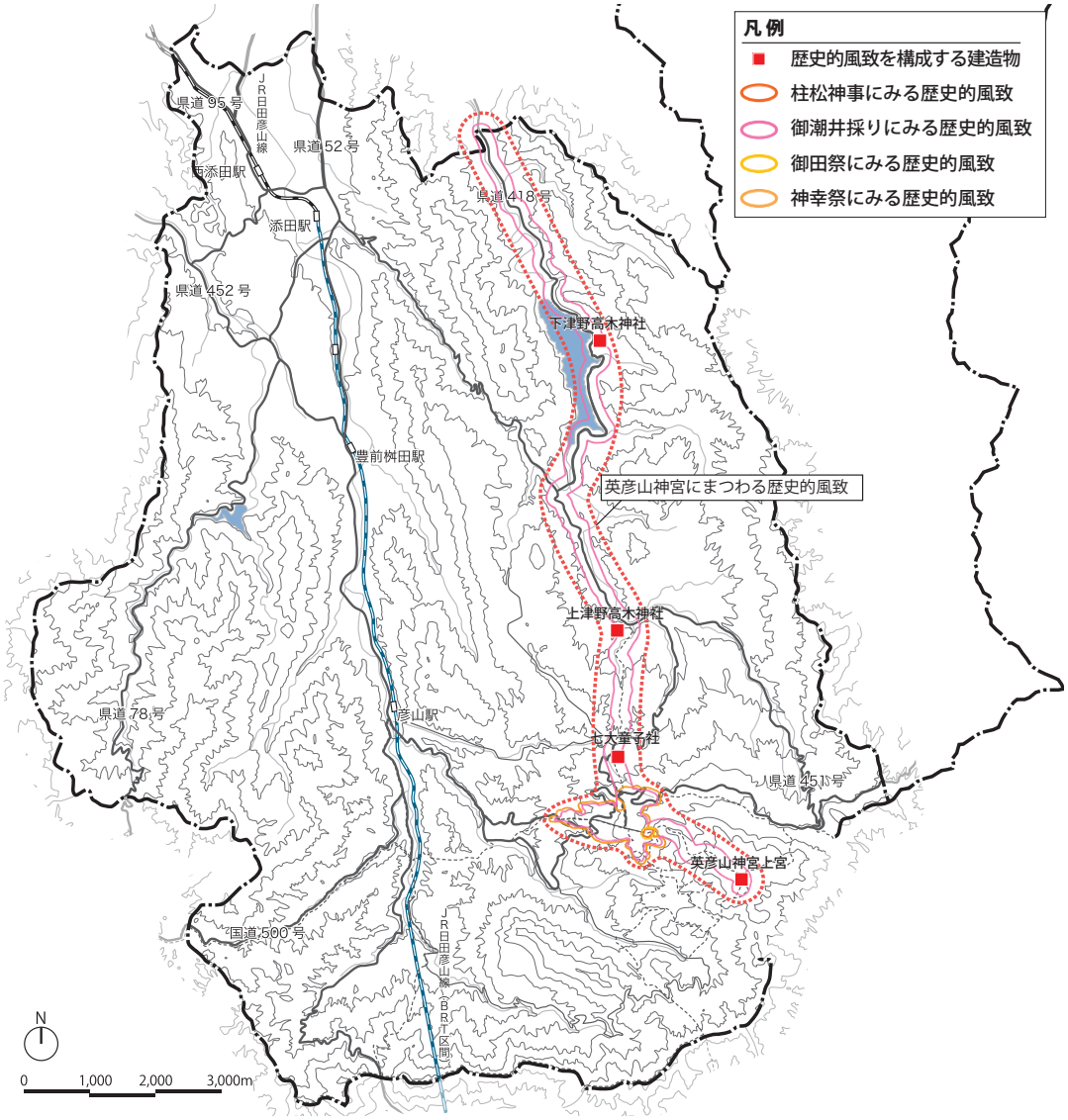

図　英彦山神宮にまつわる歴史的風致の範囲

コラム１　峰入り（入峰）

■英彦山における峰入り

修験道の中で最も秘儀とされる行事に峰入りがある。峰入りとは、山伏が行場を巡り、断崖絶壁での荒業や断食等を行う山中修行のことで、その成立は、古代から中世であり、仏教の影響を強く受けている。つまり、仏教に置ける精神世界と現実世界を合体しようとする修行が峰入りであり、英彦山の峰入りは熊野（くまの）・大峰（おおみね）山（さん）・吉野（よしの）における大峰入りに由来があると言われる。峰入りは、大日如来を中心とする仏菩薩の曼荼羅を山岳に展開しており、大峰入りでは、「胎蔵界（たいぞうかい）」を熊野、「金剛界（こんごうかい）」を吉野とし、その二つを結ぶ大峰山における修行を通じて山伏は即身即仏となり、民衆を済度（さいど）するための厳しい修行をしていたとされる。

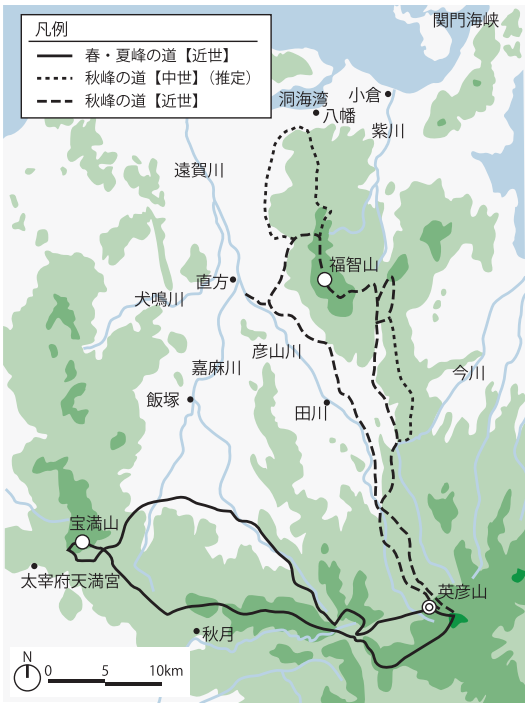

図　三季峰入りのルート
＊長野覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』を基に作成

英彦山では、熊野・大峰山・吉野における大峰入りにならって英彦山を「胎蔵界」、宝満山（ほうまんざん）を順峰の「金剛界」、福智山（ふくちやま）を逆峰の「金剛界」とした。順峰は、「春峰」や「胎蔵界入峰」とも称し、英彦山を拠点に宝満山へ往復する２月 15 日～４月初旬（近世は４月９日）までの入峰を指す。同じルートを３月 10 日駈入（かけいり）の「順逆不二峰」は「夏峰」や「華供（くげ）峰」とも称する。逆峰は、「秋峰」や「金剛界入峰」とも称し、７月晦日に駈入、英彦山から福智山へ往復する（近世は９月４日出峰）。双方とも往復約 130km の行程である。これらを三季入峰と称し、順峰・逆峰ともにそれぞれ 48 宿を配置して仏となるための十界の修行を行った。英彦山胎蔵界から宝満金剛界、福智金剛界に出て、再び英彦山胎蔵界に戻る。このことは、「擬死再生」を意味し、峰入修行をすることで一度生まれ変わったということになる。峰入修行の回数は、山伏の位階にもつながり、三十六度で大越家（だいおっけ）とよばれる最高位に達した。この三季入峰が整った記録は、室町時代の文安２年（1445）に記された『彦山諸神役次第』が最初である。

■近年における峰入り

英彦山における峰入りは、『英彦山神社日誌（ひこさんじんじゃにっし）』によると、明治維新による神仏分離以後は多聞坊（たもんぼう）により私的に伝承されていたことがわかる。その後、断続的に継承され、明治 43 年（1910）８月には大々的に秋峰が行われたと言い、その時の行場を結界する「股木（またぎ）」が残されている。その後、平成６年（1994）より継続的に修験春風会が福智金剛界への峰入りを執り行い、平成 25 年（2013）５月には 150 年ぶりに宝満山修験会により英彦山への峰入りが果たされた。今でもかつて英彦山の山伏たちが挑んだ古式修験道にならって山中を巡り、祈りを捧げている。

股木